

「藤原三兄弟の集大成」——吉田神社

「藤原三兄弟の集大成」——吉田神社



第二回

孤立した間瀬には、他郷とつながる玄関口は、海と海を背にして多宝の峰を越える峠道しかありませんでした。

その峰が一番低く他郷の石瀬村と接する地域の小字名は「峠」といい、村境のこの間瀬峠は、現在スカイラインが峰の頂をかすめ、手を合わせた地藏さんも今では不明、訪れる人もほとんどいません。その峠道、海を背に二、三步あるけば、海や潮風に浸ったふるさと間瀬は遠く消え、なお急峻な坂を下っていくと、約一里半程で吉田村があります。昔は間瀬でとれた鱒、鯖などを背負い、おなご衆が天秤棒でこの峠を越え売り歩く在郷街でした。

そんな在に間瀬大工の代表作「吉田神社」が残っています。

文政七年（一八二四）約四年間を費やして遷宮式が行われたこの神社は、大工彫刻の極地を示す彫り物が施されており、近い将来、県の文化財指定が期待される建造物です。

棟梁篠原嘉左衛門（重房）、脇棟梁田中三右衛門、舎弟田中要蔵と棟札に残っていますが、彫刻は主に三右衛門がノミを振るったと

伝えられています。

彼ら三兄弟は、能登の本誓寺棟梁、嘉左衛門（副重）の子供たちで、主に彫刻を手掛けた三右衛門は、仕事に厳しい職人でしたが、子供には優しい心の持ち主でした。

仕事中、境内の作事場の木片で遊ぶ近所の子供たちの姿をみるたび、我が子にだぶらせたのか、この神社を検索すると、子守する童が彫刻の題材として刻まれているのが発見できます。この童たちは、後にこの集団に弟子入りしたのでしよう、その成長した姿が、幕末明治初頭の棟札に見ることができ

ます。

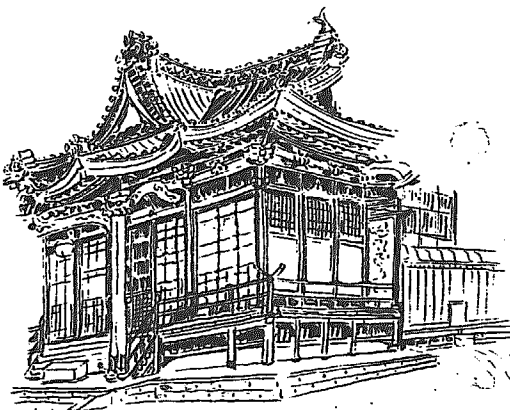
平成六年度「吉田町歴史的建造物調査報告書」にはこの神社についてこう評されています。

この地域の往時の大旦那の経済力と、最高の大工技術を結集した建物で、総ケヤキ造り、彫刻を可能な限り多く配することに価値観を見出していた近世末の代表作品。しかも全体の形は均整がとれ、棟梁の腕の良さがうかがえる作品である。近郷、近在の神社建築の二本として存在していたと思われる。——とあります。

このように、間瀬大工の彫刻に振るったノミは唯一品制作的であり、躍動感に満ち富んだものが多く、透かし彫りなどの精緻さ、量の豊富さ、表現力の力強さ、そして何よりも彫刻の主題を中央に集中させることなく、広がりをもたせることによって生まれる躍動感、期待感に富んだ作風に仕上げられ

当時の社寺建築は、過飾であり、力感、均整といった建築本来の技法よりも、建築随所を飾る彫刻が重視されるようになり、大工とは別に、彫刻を専門にする彫刻師が現れたのもこの当時です。

間瀬大工は、大工仕事と同様彫刻にもちからを入れていたこととして、彫り物の迫力とともに建造から、彫り物の迫力とともに建造として、安定度が見事に増幅されています。



吉田神社拝殿（スケッチ 吉田町 山田慶二氏）

彫刻を得意とする三右衛門は、吉田神社の伝承のため、江戸に出て、將軍家齊公に召され、築地本願寺、江戸本丸の棟梁をつとめた、とも伝えられています。

通称上ノ篠原嘉左衛門の檀寺、願龍寺の当院彰文は

ているところが特徴です。又、龍の彫り物の口の中に、微妙かに朱紅が見られることや、彫り物全体に彩色が施されていたことなどから、おそらく遷宮式には、そのでき映え、完成度において、近郷大衆は驚き、間瀬大工への称賛は一段と高まったことが容易にうかがえます。

継寺する文政以降の過去帳を発見しました。彼は抹香臭さのない好青年です。過去帳に、——篠原嘉左衛門重房、安政四（一八五七）七十才の記念に太子像を開眼寄進、——とあることや、——慶応三年嘉左衛門父八十一才没、——ともあることから、三右衛門が生まれたのは天明六、七年頃（一七八六）、

父嘉左衛門副重が能登の本誓寺の造営中に生まれたことになりました。父副重が子供たちに、一子相伝で仕込んだ技は、見事に、吉田神社に結実。同神社の完成を見とけると、安心したのか副重は翌年亡くなりました。

この篠原家の事跡は、否として判明しませんが、当院彰文の手にする過去帳には、「篠原家は角海村城願寺開基と能登よりカケ落……縁あって願龍寺の伴僧を勤め……家具屋敷を与え、壇縁は当時奉公の縁故に依り……」とあります。嘉永六年重房は同寺の中尊前の唐狭間彫りを寄進しましたが、明治八年のお盆月、村内から出火、高台にある海雲寺を残して、三つの寺や宮、そして船小屋など三〇〇戸余りを焼き尽くしました。

残った家は二十軒に足りず、寄進した欄間も灰になってしまいました。——村中一同困苦言語に絶し——と当時の状況を記しています。——とおそらく海に出る船もなく、村中は糧を求めて、出稼ぎする術しかなかったと思われる。

重房の技は、子供の熊三郎（重典）要三郎（教重）俊二（治）郎（重勝）らに相伝されました。中でも、熊三郎は一子相伝的な感覚を捨て、一門の他国の弟子にも広く技を伝授。間瀬八幡社、焼失した願龍寺の再建棟梁としても知られています。

（岩室村生涯学推進本部）